/81-356901114=アサガミプレスKK/07-08-30-15:34/001-001 8月30日 15時43分31秒
発信元：アサガミプレスセンターKK

風韻

灼熱のドバイ

山下・ヴォーン・亜仁香

建設関係に従事する夫の仕事でドバイに来て早一年がたつ。日本から見るドバイというと石油マネー、不動産バブル、ショッピングや豪華ホテルの観光地というイメージだろうが、ここで生活することは華やかの一点では説明しきれないものがある。ゴールドラッシュと呼ばれるように先進国、発展途上国から労働者がそれぞれの思惑をもってドバイには毎日のように移民がやってくる。現地の人は一割にも満たないというから、まさにここは移民国家だ。

欧米人はここに来れば給与が倍増すると聞き、発展途上国の人間は国に残した家族を養うために出稼ぎに来る。こんなに貧富の差が激しい場所は見たことがないほどで、ベントレーやロールスロイスが並ぶすぐ隣の通りには収容所のごとく労働者向けのキャンプがあったりする。

かつて、テレビ局で報道記者をやっていた私もメディア特区があると聞き、期待したが、検閲の厳しさと、雀の涙ほどの給与でも働いてしまう記者たちの激しい価格競争に疲れて、PRコンサルタントとして働くようになった。ところが最近妊娠が判明し、入社したばかりの新しい代理店の上司に報告したらその場で解雇された。国際労働法では禁止される事項も小さな町ドバイではトラブルを避けるため、ほとんどが泣き寝入りに終わる。しかし、ここはチャンスの町、解雇された足で友人に話し、二つ返事で日系企業向けサービス事業を立ち上げるスポンサーになってもらった。灼熱のドバイでは強い者だけが生き残るのだろうか。（ヤマシタ・ウォーン・アニカ＝コンサルタント）

文化

地球温暖化

IT社会のエコデザイン

藤本　淳

「資源・エネルギー過食症」社会から脱脚

皆さんは「ダイエット」を試みたことがあるでしょうか？　試みたことのある人は、その難しさを実感していると思います。日々食事や運動に注意を払い、それを継続しなければなりません。効果も直ちに分からないので、忙しかったりすると挫折しそうになります。

地球温暖化防止における、CO_2の排出削減は、国民全体がダイエットに取り組み、それを続けることに似ています。それも短期間で六％、二〇五〇年では五〇％以上もの削減が求められています。それができないと将来、自然環境は破壊され、社会経済は大混乱するでしょう。目標達成には、ダイエットが必要な体となった原因を探ることが重要です。この原因として、退屈さ、寂しさ、無目的という「こころ」の空虚感を満たすための過食と排便なライフスタイルの追求があると考えました。地球温暖化防止で目指すべきは、「資源・エネルギー過食症」社会からの脱却なのです。

産業革命は、社会経済システムや文化を大きく変え、特に先進国でその豊かさを享受しています。半面、コミュニティーや家族とのつながり、人間と自然との関係を希薄にしたことも指摘されています。これが「資源・エネルギー過食症」社会の始まりともいえます。

現在のITの進展は社会経済や、文化を大きく変えようとしています。第二の産業革命ともいえるIT革命の到来です。IT革命では、経済価値が従来の「物質」から無形の「知識・情報」へ移ります。これにより、脱物質化が進み地球温暖化防止にプラスに働きます。しかし、人やコミュニティーとのつながりを希薄にし、軽便なライフスタイルを助長する可能性もあるのです。革新技術の普及においては、社会の効率や利便性を高めるプラス面だけでなく、コミュニティーや人のこころへの影響を合わせて考える、総合的なアプローチが必要なのです。

ITと融合した2050年脱温暖化社会

『2050年脱温暖化社会のライフスタイル』（東京大学RCAST脱温暖化IT社会チーム・電通　消費者研究センター編）では高度に発達したITが伝統的社会価値と適切に融合しています。そのビジョン作成では、未来社会で実現してほしい（なるであろう）キーワードを、市民約千人へのアンケート、各界有識者への十八回のインタビューで二十分程度しかかりません。シティ間に点在するカントリー地区には、シティへの公共交通の拠点が設けてあり、情報網も、農地・緑地などの屋外でも自由に通信手段を利用できるように完備されています。

本書は五十嵐家（仮想）の二〇五〇年脱温暖化社会での日常生活を、七つのシーンで表現しました。夫婦はともに二〇〇〇年代の生まれで、二人の子供がいます。夫と息子はカントリー地域で、娘はシティの学生寮、妻はビッグシティのコンドミニアムに住んでいます。

想定社会では離れていても家族は一緒

「離れていても家族は一緒！」のシーンでは、五十嵐家の夕食の様子を描きました。バーチャルドア・システムは、仕事や勉強で離れて暮らさなければならないときでさえ、家族間の活発な、そして豊かなコミュニケーションを可能にします。二〇五〇年の脱温暖化社会では、知能ロボットが、時間管理、情報分析の労働を肩代わりしてくれ、長時間の労働や単純作業から解放され、ゆとりをもって働いています。仕事において、個性に応じて、思考力・感性・創造性を最大限に発揮するのが当たり前になっています。高度に発達したITは、ビジネス会話や情報収集を、どこにいても可能にします。「畑でもIT！」のシーンでは、五十嵐氏がロボットタイプの機械を使って畑を耕し、同時にインターネットで別の仕事をしています。同時に複数の職業につくことは、珍しくありません。そばで息子が、父親の手伝いをしながら、IT虫眼鏡を使って、珍しい昆虫の観察とその情報を収集しています。「エコマネーでショッピング！」では、欲しいものを買うために、日々の生活を工夫してエコポイントをためている様子を、「仕事場から授業参観！」では、ITを活用した二〇五〇年の教育風景を描きました。

想定した社会では、生活からのCO_2排出量の五〇～六〇％削減が可能であるとの試算結果が得られました。直面している地球温暖化問題は、自然破壊という直接的な危機だけでなく、社会が抱えた精神的荒廃への警告ととらえることもできます。温暖化だけでなく、社会問題を含め総合的に考えるアプローチが、今、必要とされているのです。

（ふじもと・じゅん＝東京大学先端科学技術研究センター特任教授）

文化としてのテレビコマーシャル

CMを文化社会学的に研究し分析

よむ

▽山田奨治編
▽世界思想社・3150円

この本の価値ある特殊さは、執筆に関わった三十人以上の研究者らが出版に先立って十八回（うち十回は二日以上）の研究会を三年にわたって繰り広げた成果であるという点にある。国立の大学共同利用機関法人である国際日本文化研究センター（京都市）主催の共同研究会の活動成果だから、既存の広告研究書とはまったく異質。例えば、研究を目的としてACC、ニホンモニター、TCJ、日本天然色映画等の一九五〇年代からの莫大なCM資料の観察を基に今のCM以外の形式をもっていたCMの研究や、表現が日常経験の捉え方、生活の中のモノ、健康、動物、自然などの見方とどのように関連をもったのか、を通時的に分析する社会学的研究などが、資料の裏付けをもって分析される。

半世紀を経てテレビCMは単に経験者・関係者の記憶を超えて文化社会学研究の対象資料になった。それはどのようなことなのかが形となった象徴的な一冊。（み）

夕留寄席

第十八席　御神酒徳利

桂歌若

とある旅籠で番頭を務める善六さん。ある日のこと、旅籠の大掃除が行われます。その最中、善六さんは家宝である御神酒徳利をなくしてはいけないと、水瓶の中にしまっておきますがそのことを忘れてしまいました。掃除が終わった後、その御神酒徳利がなくなったと大騒ぎになります。宿中いくら探しても見つからないので、後日改めてということになり善六さんも帰宅します。帰宅後、善六さんは自分がしまったことを思い出しますが、今さら言い出せません。妻に相談すると算盤占いで見つかったことにすればよいと言われその通りにします。当然徳利は見つかり、善六さんはホッと胸をなで下ろします。ところがその様子を見ていた泊まり客が善六さんにある相談を持ちかける…という一席。

九月九日は「占いの日」だそうです。当たる、当たらないは別にして、テレビの占い番組はいつでも人気がありますし、多くの新聞・雑誌にも占いのページが設けられています。占いに興味のない方であっても、おみくじを引いた経験はあるはずですし、子供の名前を決めるときも画数は気になると思います。まあ、それだけ占いが日々の暮らしに浸透していることになります。また占いがこれだけ人々から支持されているのは、よりよい明日を迎えたいという気持ちからくるのでしょう。人によってはお悩み解消の効果も期待できますから、意外と占いは役立ちそうですね。

さて、ちょっとしたウソから算盤占い師にされてしまった善六さんは、その後東海道を旅することになり、各地で困っている人を占いで助けていきます。そして最後は…とストーリーをばらすのはここまでです。続きはどうぞ寄席でお楽しみください。（落語家）

紙切り：林家　正楽